1 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ
2 春過ぎて夏来にけらし白妙の
3 足引きの山鳥の尾のしだり尾の
4 田子の浦に打出でてみれば白妙の
5 奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の
6 かさゝぎの渡せる橋におく霜の
7 天の原ふりさけ見れば春日なる
8 わが庵は都のたつみしかぞ住む
9 花の色は移りにけりな徒に
10 これや此の行くも帰るも別かれては
11 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
12 天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよ
13 筑波嶺の峯より落つるみなの川
14 陸奥のしのぶもぢずり誰故に
15 君がため春の野に出でて若菜つむ
16 立別れいなばの山の嶺におふる
17 ちはやぶる神代も聞かず龍田川
18 住の江の岸による浪よるさへや
19 難波潟短き葦のふしのまも
20 佗びぬれば今はた同じ難波なる
21 今来むといひしばかりに長月の
22 吹くからに秋の草木のしをるれば
23 月見れば千々に物こそ悲しけれ
24 此の度は幣もとりあへず手向山
25 名にしおはば逢坂山のさねかづら

26 小倉山峯のもみぢ葉心あらば
27 みかの原わきて流るる泉川
28 山里は冬ぞ寂しさまさりける
29 心あてに折らばや折らむ初霜の
30 有明のつれなく見えし別れより
31 朝ぼらけ有明の月と見るまでに
32 山がはに風のかけたるしがらみは
33 久方の光のどけき春の日に
34 誰をかも知る人にせむ高砂の
35 人はいさ心もしらずふるさとは
36 夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを
37 白露に風の吹きしく秋の野は
38 忘らるる身をば思はず誓ひてし
39 浅茅生の小野の篠原しのぶれど
40 忍ぶれど色に出でにけり我が戀は
41 戀すてふわが名はまだき立ちにけり
42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ
43 逢ひみての後の心にくらぶれば
44 逢ふことの絶えてしなくばなかなかに
45 哀れともいふべき人はおもほえで
46 由良の戸をわたる舟人楫をたえ
47 八重葎しげれる宿のさびしきに
48 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ
49 御垣守衛士のたく火の夜はもえ
50 君がため惜しからざりし命さへ

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草
52 明けぬればくるるものとは知りながら
53 嘆きつつ獨りぬる夜の明くるまは
54 忘れじの行末までは難ければ
55 瀧の音はたえて久しくなりぬれど
56 あらざらむ此の世のほかの思ひ出に
57 廻り逢ひて見しやそれともわかぬまに
58 有馬山ゐなのささ原風吹けば
59 やすらはで寝なましものを小夜更けて
60 大江山いくのの道の遠ければ
61 古への奈良の都の八重ざくら
62 夜をこめて鳥のそら音ははかるとも
63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを
64 朝ぼらけ宇治の川霧絶えだえに
65 恨み佗びほさぬ袖だにあるものを
66 諸共にあはれと思へ山ざくら
67 春の夜の夢ばかりなる手枕に
68 心にもあらで憂世にながらへば
69 嵐ふく三室の山のもみぢ葉は
70 寂しさに宿を立ち出でて眺むれば
71 夕されば門田の稲葉おとづれて
72 音に聞く高師の濱のあだ浪は
73 高砂の尾の上の桜咲きにけり
74 うかりける人を初瀬の山おろし
75 契りおきしさせもが露を命にて

わが衣手は露にぬれつつ
衣ほすてふ天の香具山
ながながし夜をひとりかもねむ
ふじの高嶺に雪は降りつつ
聲きく時ぞ秋は悲しき
しろきを見れば夜ぞふけにける
みかさの山に出でし月かも
世をうぢ山と人はいふなり
我が身世にふるながめせしまに
知るも知らぬも逢坂の関
人にはつげよあまの釣舟
をとめの姿しばし留めむ
戀ぞつもりて淵となりぬる
みだれ初めにし我ならなくに
わが衣手に雪は降りつつ
まつとし聞かば今帰り来む
から紅に水くくるとは
夢の通ひ路人目よくらむ
あはで此の世をすぐしてよとや
身をつくしても逢はむとぞ思ふ
有明の月を待ち出でつるかな
むべ山風をあらしといふらむ
わが身ひとつの秋にはあらねど
紅葉の錦神のまにまに
人にしられでくるよしもがな

さしも知らじなもゆる思ひを
なほ恨めしき朝ぼらけかな
いかに久しきものとかは知る
今日を限りの命ともがな
名こそ流れてなほ聞えけれ
今一たびの逢ふこともがな
雲がくれにし夜半の月かな
いでそよ人を忘れやはする
傾くまでの月を見しかな
まだふみも見ず天の橋立
今日九重に匂ひぬるかな
世に逢坂の関はゆるさじ
人づてならで言ふよしもがな
あらはれ渡る瀬々の網代木
戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ
花よりほかに知る人もなし
かひなく立たむ名こそ惜しけれ
戀しかるべき夜半の月かな
龍田の川の錦なりけり
いづこも同じ秋の夕暮
あしのまろやに秋風ぞ吹く
かけじや袖のぬれもこそすれ
外山の霞立たずもあらなむ
はげしかれとは祈らぬものを
あはれ今年の秋も去ぬめり

今ひとたびのみゆき待たなむ
いつみきとてか戀しかるらむ
人目も草もかれぬと思へば
置きまどはせる白菊の花
暁ばかり憂きものはなし
吉野の里に降れる白雪
流れもあへぬ紅葉なりけり
しづごころなく花の散るらむ
松も昔の友ならなくに
花ぞ昔の香ににほひける
雲のいづこに月宿るらむ
つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
人の命の惜しくもあるかな
あまりてなどか人の戀しき
ものや思ふと人の問ふまで
人知れずこそ思ひそめしか
末の松山浪こさじとは
昔はものを思はざりけり
人をも身をも恨みざらまし
身のいたづらになりぬべきかな
行方もしらぬ戀の道かな
人こそ見えね秋はきにけり
砕けてものを思ふ頃かな
晝は消えつつものをこそ思へ
長くもがなと思ひけるかな

76 わたの原漕ぎ出でて見れば久方の
77 瀬を早み岩にせかるる瀧川の
78 淡路島かよふ千鳥の鳴く声に
79 秋風にたなびく雲の絶え間より
80 ながからむ心も知らず黒髪の
81 ほととぎす鳴きつる方を眺むれば
82 思ひわびさても命はあるものを
83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る
84 ながらへばまた此の頃やしのばれむ
85 夜もすがらもの思ふ頃は明けやらで
86 嘆けとて月やはものを思はする
87 村雨の露もまだひぬ槙の葉に
88 難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ
89 玉の緒よたえなば絶えねながらへば
90 見せばやな雄島のあまの袖だにも
91 きりぎりすなくや霜夜のさむしろに
92 わが袖は汐干に見えぬ沖の石の
93 世の中は常にもがもな渚こぐ
94 みよし野の山の秋風小夜更けて
95 おほけなくうき世の民におほふかな
96 花さそふあらしの庭の雪ならで
97 来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに
98 風そよぐ楢の小川の夕ぐれは
99 人もをし人もうらめしあぢきなく
100 百敷や古き軒端のしのぶにも

雲居にまがふ沖つ白浪
われても末に逢むとぞ思ふ
いくよ寝覚めぬ須磨の関守
もれ出づる月の影のさやけさ
みだれて今朝はものをこそ思へ
ただ有明の月ぞ残れる
憂きに堪へぬは涙なりけり
山の奥にも鹿ぞなくなる
憂しと見し世ぞ今は戀しき
ねやのひまさへつれなかりけり
かこち顔なるわが涙かな
霧立ちのぼる秋の夕暮
みをつくしてや戀ひわたるべき
忍ぶることの弱りもぞする
濡れにぞ濡れし色はかはらず
衣かたしき獨りかも寝む
人こそ知らね乾く間もなし
海士の小舟の綱手かなしも
故郷寒く衣うつなり
我が立つ杣に墨染の袖
ふりゆくものは我が身なりけり
焼くや藻塩の身もこがれつつ
みそぎぞ夏のしるしなりける
世を思ふ故にもの思ふ身は
なほあまりある昔なりけり

（社）全日本かるた協会公認「小倉百人一首　歌かるた」より